

るよ』というサインを生徒に送ることもできます。」(浅野先生)

### 人間関係を築く面談

1年次では面談を通して「高校生としての教師との付き合い方」に気付かせたいと言う浅野先生。逐一指示をするのではなく、生徒の自主的な取り組みを支援するのが高校教師だということを理解させようとした。そして、翌年の2年次では生徒の視野を広げることが念頭に置いて、面談に当たったと言った。

「2年生はどついても学習面で中だるみの時期です。そんな時期はむしろ部活やボランティア活動、友人関係などを通して、いろんなもの目を向けることが大切だとSHRや学年集会、面談などで示唆しました」(浅野先生)

2学年の学年会では面談内容の共有化が図られた。各教科の達成目標、進路面や生徒の人間関係についてどのような観点で面談を行うかを教師間でまとめた。さらに教師が生徒役を務めての模擬面談まで行ったと言った。

「面談でどんな風に生徒を理解し、生徒の自己理解につなげるか、担任同士で面談の手法に

ませぬ。面談はあくまで問題提起。生徒の自己探索の場に過ぎず、その後の指導、生徒自身の取り組みが重要なのです」(浅野先生)

浅野先生は1年生のクラス担任を務めた際、生徒自身に気付きを与える機会として、「進路学

福井県立  
高志高校

自己探究のための  
情報を準備して、  
生徒に考えさせる  
面談を実施

習ノート」を生徒に持たせることにした。ノートは進路に関する資料をファイリングするもので、そこに面談の感想なども書かせてファイリングさせた。

「面談で気付いたこと、学んだことを具体的に書き、自分の中で今後の指針として確立させていきます。さらに、それを担任が読み、コメントを付けて返すことで、きみの考えを支援す

生徒とのコミュニケーションを密にして、個々の生徒の課題を把握し、その解決のため

の示唆を与える。生徒の進路観が多様化し、高校3年間の指導の中で、一斉指導だけではクラス運営が困難になりつつある今、多くの高校が面談を中心とした個別指導をより積極的に導入し、生徒把握に努めている。

東京大、京都大をはじめとする難関国立大に毎年数多くの合格者を輩出する福井県立高志高校でもここ数年、特に1、2年次の生徒に対する個人面談に力を入れている。同校ではこれまで独自の「進路学習ノート」の作成や、担任間での個人面談の内容の共有化などを行ってきた。その中心的役割を果たした浅野裕治先生は個別指導で求められるスタンスを「教師が生徒を引

つ張り上げるよりも、横並びで手を貸す、後ろから押し上げてやること」と語る。そのためにも、生徒が今どんな課題を抱えているのか、何を必要としているのかを知ることが重要になる。「面談は確かに大切ですが、ややもすると生徒は教師に言われつつ放して、ではどうしなければならぬか、を自分で考えないまま終わってしまいます。所詮、面談だけでは問題は解決し

### 生徒の矛盾を整理する

さらなる詳細な生徒把握の機会として、高志高校は今年の3月、2年生に進級する直前の1年生を対象に「スタディーサポート」(学習状況及び学力調査を基に指導をサポートするシステム)を実施した。この時期に行ったねらいは、新担任の生徒理解の支援だ。

「これまで2年生の担任には、独自のアンケート調査で生徒の学習状況、進路意識を把握し、面談に臨む者もいました。しかし、準備に時間をかけるよりも、面談後の指導に時間をかけるべきですよね。」

「スタディーサポート」の導入

で、生徒把握の材料が容易に準備でき、しかも学年全体が同じ資料を話し合いができる環境が整いました。(第2学年担任・畑中正美先生)個人、クラスの学習状況の分析を各担任が行うには膨大な労力が必要になる。「スタディーサポート」は、忙しい新学期にいち早く面談を行いたいという同校の思いにもマッチしたよつだ。「新担任は少しでも早く生徒のことを知りた



浅野裕治  
生物担当  
同校に赴任して9年目、教習相談係を務める。進路学習ノートの作成など、同校の個別指導の発展に尽力している。



畑中正美  
化学担当  
同校に赴任して10年目、進路指導部所属。今年度は2学年のクラス担任を務める。



山田泰弘  
日本史担当  
同校に赴任して6年目、進路指導部所属。今年度は2学年のクラス担任を務める。

り、教師、生徒双方の準備ができていない」と苦手科目は何?』志望校はどこ?』といった表面的なやり取りしかできなくなり。生徒の現状を踏まえ、さらに突っ込んだ内容を話し合うのに「スタディーサポート」は有効でした。(第2学年担任・山田泰弘先生)

2年次の面談では、1年次のことと踏まえた深みのある面談を行いたいと、畑中先生、山田先生は語る。例えば、模試結果だけを材料

### 自己を振り返る機会を

今年度の2年生の指導でも、やはり「生徒と共に考える」という思いが教師集団にはある。

「例えば、生徒には模試の度に自己評価表を書かせ、各教科ごとに特によくなった設問、できなかった設問について、それぞれ勉強法でよかった点、改善すべき点などを振り返らせませす。模試を受けつつ放しにするのではなく、生徒が自分の力で考え、今後の方針を見つけられるようにするのです」(山田先生)

にした面談では、生徒の抱える具体的な課題やその解決の糸口は短時間では見えてこない。「どの科目のどの分野が弱いのか、学習スタイルの問題点はどこか、それにどう対応すべきかなど、模試結果だけでは分からないデータ、解決策が「スタディーサポート」で得られました。担任が教科を越えて生徒の全体を見渡した面談ができるようになったのです」(畑中先生)

浅野先生も「生徒に書かせれば分かることを